マジックディフェクター

加那 翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マジックディフェクター

【Ｎコード】
Ｎ２８８８Ｚ

【作者名】
加那　翔

【あらすじ】
魔法が使えるのが当たり前になっている現代世界。そこには一人の少年がいた……彼の名前は【柊隼人】。
彼はこの世界で唯一、魔法を使えない魔術士だった。
※この作品は作者が書いている【Ｖａｌｃｈｅ－ヴァルチェ－】のアレンジ版です。※某新人賞に投稿予定なので評価などをもらえると嬉しいです。

第1話　Ｓｔｏｒｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｏｐｅｎｉｎｇ　～始まり～（前書き）

・この小説は作者が書いている【Ｖａｌｃｈｅ－ヴァルチェ－】の改善版となっています。
・某新人賞に投稿予定の作品です。
・評価をもらえると自身につながるので嬉しいです。
それと同時にここはこんな感じにしたほうが……、とかいう意見ももらえると嬉しく思います。
・状況によっては消すかもしれませんのでご了承ください
・小説家になろう向けに改行など出来ておりませんのでそこもご了承くださいませ

第1話　Story of the opening ～始まり～

“あなたは魔法を信じますか？”

この質問に普通に答えるなら……信じない。と、そう即答できるだろう。だが、約１００年前からそんな常識は根っから引っくり返された。

「あ、そういや、どうやって魔法を見つけたんだっけ？」

高級感溢れる車の中でふと、そう思ったーー俺、柊隼人（ひいらぎ はやと）であった。

「それはあれですよ、隼人様。頭がおかしいと言われていた研究員がたまたま【魔術器（ヴェルジュ）】を開発出来たっていうのが、始まりだったはずです」

魔術器――それは、約１００年前に作られた代物。だが、開発成功は偶然の産物だった。

その偶然の産物を量産し始めた理由は、突然この世界に現れた魔物対策らしい。魔物とは、この世界にいきなり出現しだした化け物の総称だ。そしてその魔物を討伐するために作られた武器……それが魔術器。

「まぁ、あんまり興味はないんだけどな。この学院に来ることになったのも“あいつら”のせいなんだし」

「隼人様」

感慨深い表情で窓の外の気色を見ながら呟く俺を見て、家で働いてくれていた一人の侍女が言う。

彼女の名は湊（みなと）　朱音（あかね）といって、黒髪ロングで切れ長の目が特徴の女性だ。ちなみに職場では皆のお姉さんって立場で、正直に幼少のころから今までずっとお世話になった人。だからといって、歳をとってるわけでもない、というのも朱音さんは１５歳のときからウチで働いてくれたからだ。

あ、ちなみにさっきの質問に答えてくれたのも彼女で、現在進行

系で運転してるのも彼女だ。
「それにしても一流の魔術士（ヴァルチェ）を育てる魔法学院ね」
隣に置かれていたパンフレットの表紙だけ見て言う。
そのトップページには『あなたの才能を開花させます』というキャッチコピーと学校の写真があった。
あなたの才能を開花って、かなり怪しい宗教のキャッチコピーみたいじゃねぇか。と、苦笑気味に思った。
「あ、隼人様、パンフレットはご覧になっていただけましたか？」
「いや、今見てるから」
「それを聞いて安心しました。最後までしっかりと読み上げてくださいね」
「はいはい」
どうでもいいような返事をしながら、何でもかんでも世話をしたがる朱音さんに心の中でだけ呆れる。
ーーへぇ、実戦込み3年のカリキュラムね。中々本格的じゃないか。
それからもパンフレットを読み上げていったのだが、目の付いたのはその部分だけだった。その他にはほとんど同じようなことしか書かれていなかった。3年間というカリキュラムはどこの高校でもおんなじだけど、実戦込みか……。さすが国が建てた魔法学院は違いますってか。

「……隼人様、目的地につきましたよ」
「あ、もうついたんだ」
——結局、パンフレットを最後まで読み上げてしまったな。
そのせいか時間が経つのが早い気がした。家で聞いた情報だと1〜2時間は普通にかかるはずなんだが。
「それは隼人様が途中で寝てたからですよ」
ああ、そういやそうだったな。
うたた寝程度のつもりだったのだが、普通に爆睡してしまってい

たらしい。
「ここが、今日から通うことになる【クラリア魔法学院】か」
車から降り、目の前にそびえ立つとても大きく立派な校門を見上げながら呟く。
俺は家庭で色んな事情があって、この魔法学院に転入することになった極普通の高校生だ。
基本的に黒く、ところどころに赤のラインが入っている学院指定の制服（ブレザー）を着ている。
「それにしても、大きな門だな」
（こんなに門を大きくする意味ってあるのか？）
身長１７５ｃｍの俺でも、４分の１もいかないぐらいだから少なくとも５ｍ以上はあるだろうな。
「で、それは置いておいても良いとして……」
遅れてきた場合って、どうやって入ればいいんだろうか？　と思う。
このクラリア魔法学院は、学生寮があって基本的には外出できない。
つまり、外出することなんてあまりないので、この校門の通り方がわからないということだ。
それに俺の場合、家の都合で遅れると報告を入れていたんだけど、学校側から何の連絡もきてないんだよね。
「これって、どうしたら良いんだろうか？」
あれ、これってツンだ？　と思いながら視界を動かすと、その横に少し小さい門を見つけた。
「こっから入れそうだな」
そう考えて、門とくぐり抜けようとした瞬間――
「今日から通うことになってる柊君？」
不意に後ろから声をかけられる。
「うひゃあ！？」
その声に驚き、素っ頓狂な声をあげてしまう。

振り返えると宝石のような紅い瞳が特徴的なお姉さんがいた。決してご機嫌とりでお姉さんといってるわけじゃないぞ。本当にお姉さんに見えたからだ。

「えぇっと、柊君ですよね？」

「ええ、そうですけど」

「あ、申し遅れました。　私、このクラリア魔法学院1年A組副担任の紅（くれない）　有紗（ありさ）です。よろしくね」

迎えに来るために1年A組の副担任が来た。つまり俺は1年A組に入ることになってるってことだよな。

よそのクラスの担任が迎えに来るとは到底思えないし。

「よ、よろしくお願いします」

あんまり人と喋る機会がなかったからか、いざ話すとなるとどもってしまう。

あと、目の前にいる自分の副担任が美人。それも理由の一つかも知れない。

「あ、私のほかにも紅っているから、私のことは有紗先生って呼んでね」

「はい……、わかりました」

「ふふっ、ちょっと緊張してる？」

「まぁ、そうですね。みんなより遅れたので馴染めるかどうか。っていうので、緊張はしてますね」

未だに鼓動が鳴り止まないからね。

「さぁ、どうぞお入りください」

有紗先生に言われた通り学院内に入り、先を歩いている先生の後をついていく。

第2話　Magic defect person ～欠陥品～

「とまぁ、こんな感じに色々とあるわけです」
「は、はぁ……」
表には出してないが、内心グッタリする。　普通にクラスに行けばいいのに先生が、『まだHRの時間じゃないから、今のうちに案内します』と言ったからだ。それのおかげで学院のどこに何があるかは、大体掴めた。
（この状態で笑顔で自己紹介を出来るだろうか？）
「……さてと、そろそろ授業も終わるでしょうし。　教室へ向かいますか？」
「お願いします」
思わず即答してしまう俺であった。
自己紹介さえ笑顔で切り抜けることが出来れば、あとは楽なんだからな。
「あらら、そんなに必死になるほどこれからの友達と会いたいわけね」
そんな大層な理由と違って、ただ単に脳みその容量をオーバーさせたくないだけなんだけど。
あ、それともう一つ理由があった。この案内を早く終わらせて、という思いからだろう。
「わかったわ。そんなに真剣に言うのだったらついてきて」
そういって教室に向かうだろう紅先生のあとを黙ってついていく。
その間にさっきの言葉を思いだし、顔をしかめる。
（俺に友達は出来ないよ、有紗先生。だって俺は……）
魔術士の欠陥品――欠陥魔術士（ディヴァルチェ）なんだから。

◇

「私が入ってきて、って言うまでここで待っといてもらっていいかな？」
「あ、はい。わかりました」
あの有紗先生による≪地獄の案内≫を終えてから5分後、これから自分の通うこととなる教室前の廊下の壁にもたれながら立っていた。
だが、そんな俺を叱ることなく先生は一言かけてから、教室内に入っていく。
――まぁ、そうだろうな。　あの人が連れ回したんだから。
それが原因で少し申し訳なさそうな表情で話しかけてきたのか、と納得しながら思い返していると教室から声が漏れてきた。盗み聞きするワケではないが、なんとなく耳を傾けてみる
『あ、有紗先生。転入生が来ましたか？』
『はい、きましたよ。今、廊下で待ってもらっています』
おおっ、という歓声じみたものと共に教室内の熱気が高まったように思える。
この騒々しさ、隣のクラスに迷惑じゃなかろうか？　そんな期待に添えられるような生徒じゃないと思うんだけどなぁ。
『先生！　転入生は男なんですか？　それとも女？』
いかにも活発そうなイメージが出来る女子の声が聞こえてきた。
誰かが転入してくることは既に周知されているのだろうが、名前や性別など詳しいパーソナルデータも知らないらしいな。
『転入生は男だ、それもかなりイケメンだぞ』
答えたのは聞き慣れない声。少なくとも有紗先生では無かった。性別が違っていたからだ。
そういえば先生は副担任と言っていたから、つまりは正担任だろうか。
その、おそらく正担任と思われる人物の答えに女子がわー、きゃーなんていう色めき立っているような声を上げるが、男子生徒たちは

どこか不満げに唸っているようだった。入ってからの反応が本気に怖くなってきた。　そんな俺であった。
『さて、そろそろ入ってもらいましょうか。柊君、入ってきて！』
「もう、お呼ばれか。もう少し覚悟を決める時間が欲しかったんだけどな」
　教室内に聞こえないように小さく、消えそうなぐらいの音量で呟く。
　そして取っ手に手を伸ばしながら、心底疲れきったときにしか出ない深いため息を吐きだす。
　――よし、覚悟は出来た。　大丈夫、何とかなる。
そう自分に言い聞かせて深呼吸をし、その手に力を込めた。
「失礼します」
　教室に足を踏み入れた瞬間から、ざわめきと自分に集まる視線を感じる。
　全身に妙な圧力が掛かったかのように思えたが、それを振り切り声を発する。
「柊　隼人といいます。　家の事情で色々とあり世間のことはあまり知らない未熟者ですが、よろしくお願いします」
「はいはい。　とまぁ、こいつは複雑な家庭の事情でこちらに転入してきたってわけだ。
こいつは極度の箱入り娘ならぬ箱入り息子だ。　困ってたら助けてやってくれ」
　先生の言葉にはい、と返事を返す生徒達。今、チラッとだけ見たんだけど、この俺と同じ身長もしくは小さいこいつが担任か。
「あ、そういやお前にはまだ、俺の名前を言ってなかったな」
　ふと思い出したかのように男の先生は言う。
　そういえばそうだな。　女の先生――有紗先生の名前は聞いたけど。
「俺の名前は紅（くれない）　玲也（れいや）だ。　ま、よろしく頼む」
「はっ？　紅……？」

仮りにも先生なのだから、きちんと敬語を使って接しよう。
そう思ってたのだが、先生の一言によって口に出さないでおこうとしていたタメ口の一部が出てしまった。
「ああ、そうだ」
「え、だって……えっ？」
「転入生君」
「あ、はい」
予想外の事実に焦っていると、一番前の席の見た目からして元気そうな女の子に呼ばれる。
「大丈夫、ここにいるみんなもそんな感じの反応だったから」
――ああ、そうだったのか。やっぱりな、これはさすがに驚くわ……って、そんな納得してる場合じゃない！！
「え、この二人って姉弟何ですか？」
「転校生君。今、きょうだいって漢字をどう考えた？」
「そりゃあ、姉に弟って書いて姉弟だけど」
「ぷっ……、だってさ玲也先生？」
太陽のように輝く満面の笑みを浮かべながら言う女の子の目線の先には、肩をプルプルと震わせる紅玲也先生の姿があった。その横で口元を抑えながら笑いを耐える紅有紗先生の姿も。あれ、俺なんか変なこと言った？
「柊……」
「はい、なんでしょうか？」
「俺は弟じゃねぇ！　正真正銘、夫だ――！」
え、この人何て言った？　夫？　ということは、普通に考えて有紗先生の夫ってことだよね。
「ははは、……マジですか？」
この人の聞いても嘘をつく可能性があると考え、有紗先生に聞く。
「ええ、本当よ」
くすくすと笑いながら答えてくれる有紗先生。――へぇ、これって本当だったんだ。

俺的には嘘っぽかったんだけどな～、だってかなり身長が低いし。だって成人女性よりも低いか、同じぐらいってかなりチビじゃね？
「チビって言うな――！！」
隣で飛びかかってこようとしていた玲也先生の襟元を掴み、有紗先生は引き止める。
「玲也、そろそろ話を進めなさい」
「……わかったよ」
おお、これが新妻の力か。と、納得する俺であった。
「さてと、柊の席はどこにするか？」
教室の後ろのほうを見ると、何こか空席があった。ざっと数えて４つか。
まさかもうやめたってことはないよな？　――もし、そうだとしたらどんなに厳しい学校だよ。
「おっ、ちょうど良い席が空いてるな」
この魔法学校について考えている間に、どうやら最適な席を見つけたようだ。
「柊、あの席でいいか？」
先生が示した席は、外の気色が一望出来そうな窓側の空いている席。
それと同時に授業を寝てサボるにはちょうど良いところだった。
「ああ、べつに構いません」
「それじゃ、柊の世話は頼んだぞ。水城姉」
今日から俺の席になる場所から見て、右の席に座っている大人しそうな女の子だ。ただ見ただけの印象で言ったら、さっきの女の子が太陽ならこっちの女の子は月かな。それが俺の二人の女子に対する印象だった。
「はい、わかりました」
「それじゃ、授業を始めるぞ。柊、席につけ」
「はい」
席まで歩く時間で俺は思ったことがある。

それは――、このクラスの女子が可愛い子ばっかりということだ。
はい、どうでもいい話でしたね。よし、さっさと席につこう。

第3話

「柊君で合ってるよね？」
「あ、ああ」
自分の席についた瞬間、タイミングを見計らっていたのかすぐに隣の女子が話しかけてきた。それもいきなり過ぎたせいでかなりビックリしてしまう。
「あ、いきなりでごめんね。　私、水城彩葉っていうの。　これからよろしくね」
「こちらこそよろしく」
さっき自己紹介はしたから別にしなくていいだろう。そう考え、名前は言わなかった。
それにしても、アレだな。さっき言った通り、このクラスの女子は可愛い子ばっかりだな。
水城だってそのうちの一人だ。というか、こんな黒髪美少女を可愛いと言わずに誰を可愛いっていうんだ。
「では、柊の自己紹介も終わったことだし、真面目に授業でも……」
「冗談じゃないですよ！！」
授業を始めようとする玲也先生に愚痴を言う男子生徒。
「何で実力が未知数で……こんな、見るからにモヤシみたいなやつと勉強しないといけないんですか！？」
「もやっ……」
肉をいくら食っても体つきが変わらないモヤシで悪かったな。これのせいでどんなにウチの使用人におちょくられたかわかるか？
当初はあまり気にしてないようだったんだけど、俺の食事とかそういうののお世話をしてもらっていたときに放った言葉があれだぞ。
『隼人様は細身ですから女装したら似合いそうですね』
――アレはホント、身震いしたね。
女装なんて男がしたくないものベスト3に入っているぞ。まぁ、

これは俺個人のしたくないことベスト3だけどね。
とにかくそんな気にしてる身体的特徴を言われ、いきなりキレるようなことはなかったが、俺がキレてることはバレているだろう。
だって自分でもわかるぐらい額に血が上ってるし、歯を食いしばって我慢してるのがモロバレしてる気がするから。
「しかも、こんな男か女かわからないようなやつ……」
「はぁ……、どうしてこう人を馬鹿にするやつが多いんだろうな」
さっきの理由だってそうだ、かなり理不尽過ぎないか？
何でこんなモヤシみたいなやつと一緒に勉強って……理不尽過ぎんだろ！！
「何だと！！」
「ああ、バカの頭では一回で理解できませんか」
「テメェ……」
「文句しか言わない負け犬は黙ってろって言ってんだよ！！」
そう宣言すると同時に男子生徒は大気中に無数にある光の粒子――魔力の欠片をその手に集め、魔術器を展開させる。
「テメェはここで殺す！！」
剣型の魔術器で俺に切りかかってくる。よし、これからこいつのことはバカって呼ぶことにしよう。
こんなところで魔術器を発動させたらどんなことになるか、わかってるくせによ。同時に女子達の悲鳴や、男子達の絶叫が教室中に響きわたる。
魔術器とは持ち主の魔力や魔力吸収力によって威力が変わる。魔力がよくても魔力吸収力が小さければ魔力がすぐに底をつき弱いという話はザラにある。それに対して、魔力は弱いが魔力吸収力が強ければ強いということもある。自身に残っている魔力がなくなれば吸収すればいいだけなんだからな。
つまり魔術器に強弱をつけることは不可能だ。実際、使い手によるのだから……でも、一つだけ言えることがある。
――それは、魔術器はどれだけ弱くても破壊力は抜群ということ

だ。
「いいぜ。そっちがその気なら、受けて立つぞ」
密かに眠る怒りを抑え、極めて冷静に腰のベルトから拳銃を取りだし、それで魔術器を受け止める。
その直後、膨大な魔力が俺を襲った。
「うっ……。おいおい、魔力が大きすぎんだろ」
こいつの魔力、どれだけ強いんだよ。
さすがにこれは愚痴らずにはいられない。あまり表情に出さないようにしてるが限界に近い。
こいつのバカみたいに多い魔力によって力押しされているからな。
「なっ！？」
それに驚く生徒達だが、特に驚いていたのはバカだった。
まぁ、そりゃそうか。自慢の剣を欠陥品に防がれたんだからな。
しかも魔術器ならともかくただの拳銃で。
「どうした……。俺に喧嘩売るのやめておくか？　――まっ、それが妥当だろうな。威張ってるくせに実力のないお前なら」
ブチッ、という音がバカから聞こえた気がした。
まあ、こんな台詞言われたらムカつくよな。俺でもムカつくよ、言うほうは超楽しいけどね。
でも、正直言っていいか？　この体制、かなり辛いっす。更に挑発したのは失敗だったかも。
「ふざけるのも大概にしろ！！」
その叫びと同時に剣に力が入れられる。
「ふざけてんのはどっちだ！！　いきなり切りかかってきやがって……。それに俺に対しては別に傷をつけても構わない。だが、周りの被害を考えたのか！？　仮にもだ下手に戦ってしまった場合、水城にも被害が行くって可能性を少しでも考えたのか」
俺は怪我に強いから別に対したことにはならないだろうが、周りに被害がいくだろうが。
一番後ろのこの席だと被害を受けるのは、真横の席である水城だけ

だろうな。
「水城、剣を直せ」
「……」
玲也先生の命令に不服そうな表情を浮かべながらも剣を降ろす。
そして剣先から光の粒子へとなって消えていく。
「柊もだ」
「はい」
大人しく拳銃をベルトに直す。
これ以上、戦ってたら力押しで負けてたかもしれないからな。
「お前ら、戦うなら後で戦え。もしくは来月末に【クラス対抗戦（チームマッチ）】もあるが……」
黒板にクラス対抗戦と書いて、チームマッチと呼んだ。
そして、ま、これはチーム戦だから意味ないか。と自粛するかのごとく言う。
ほう、クラス対抗戦か。読んで字のごとく、クラスの何人かがチームを組んでクラスの代表として戦うってことかな。
――参加してみたいな。まぁ、俺は普通じゃないから無理だと思うけどね。
「この際だから言っておくが、校外学習は今月の末にあるからな、覚えておけよ。ちなみに行く場所は、≪天満町（てんまちょう）≫だからな」
天満町か……、確かあそこは魔法が初めて発明された場所だったかな。
その記念に、魔術研究所や記念館が建てられているんだったっけ。
あまりにも関わりのない話だったから、もうほとんど覚えてねぇや。
（……それにあの場所に行くのは“あの人”から止められていたしな）
――ん、今月末？
ふと先生の言った言葉が妙につっかかった。今日が25日だから、今月末っていうと……来週！？
しかも天満町ってかなり遠くないか、新幹線にでも乗って行くの

か？
「さて、授業を始めるぞ」
それでも何も言わない他の生徒達を見て、事前に知らせられていたんだろう。と思うんだけどさ……俺にも事前に話しといてくれよ。
家のほうに電話とか魔法で伝言を送るとか出来るでしょうが。
「さて、今度こそ授業を始めるぞ」
こうして無事に授業が始まったわけだが……。
（全然、わかんないや）
そう、今まで勉強も出来てないので全然わからないのだ。それはもう、完璧に。
潔く手をあげて申告するべきか？　いや、でもな言うのは良いんだけど、水城にバカにされるのが目に見えてムカつく。
ーーそんなときだった。
コンコンッ、と机を指でつついたような音が聞こえた。
「んっ？」
音を出していたのは、隣の席に座っていた水城だった。
いや、バカにするだろうと思った水城はあなたじゃなくて男版水城ですよ？　と、内心は焦っていた。
顔に焦りをださない理由は、小さい頃から仕込まれてるからだ。
「ごめんね、柊君」
「へっ？」
水城がいきなり謝ったことにおどろく。　正直にいって驚いたのは悪くないと思う。
何て言ったって水城が謝る理由なんてないんだから。
「なんで謝ってんだ？」
「弟が迷惑をかけたでしょ？　それでね」
「弟？」
こいつが自分の口でそういった事により、今まで俺の中で可能性としか考えていなかった“ＩＦ”の話が実現した。
「えっ、ホントに姉弟なのか？」

「うん、あんまり似ていないって言われるんだけどね」
あー、何となくそれは言った人の気持ちがわかる気がする。
さっきまで苗字がたまたま一緒なだけだと、思ってたし。何故か姉弟なのに髪の色とかも違うからね。
「で、何でお前が謝んだよ」
「えっ」
気の抜けたかのような声を水城姉はあげるが、気にすることなく話を進める。
「アレは俺が勝手にキレたせいじゃん。　アンタのせいでもねえし、弟のせいでもねぇよ」
まぁ、アンタの弟の言動にムカついたっていうのが実は5割あるんだが、口には出さないでいた。
理由としては一つ、これを言ったらまたしても水城姉が謝ることになりそうだからだ。
「ふふっ、柊君って優しいんだね」
水城姉の満開の笑顔、それは今まで俺の中にあった“月”というイメージをガラッと変えた。
まるでそれは月とは真反対の太陽のようだった。そんなイメージと反対の笑顔を見てしまったせいか、胸の鼓動が早くなっていった。
「ん、どうしたの？」
「あ、いや、何でもない」
思わず見とれてしまっていた……、なんて口が裂けても言えないな。
――主に恥ずかしさ的な意味で。
「そう？　なら、その件は良いんだけど」
ほっ、と息をつく。
だが、それと同時にある点に気づいてしまう。
「それじゃあ次の質問だけど……」
(うわぁ、やっぱりまだあるのか)
その件って言った段階で、まだ質問があるとは思ったけどさ。ま

さか本当にあるだなんて。
「なんであんなに――唸っていたというか、考え事をしていたの？」
「……俺、そんなに口に出てた？」
「うん、小さな声だったけどね。席が近かったから聞こえたんだよ」
周りに聞こえるぐらい大きな声を出したつもりはないんだけどな……。
「で、どうしたの？」
「えぇっとね……」
これは言っても良いのかな？　ってか、言うべきなのかな。
別にいうのは良いんだけど、何というか情けない気がするんだよな。
「気にしないで、どんな悩みでも笑わずに聞いてあげるから」
「じゃあ言うけどさ」
「うんうん」
絶対に笑わない、水城のその台詞を聞いて言おうと決心する。
「全然、授業内容がわからないっす」
「……」
俺の回答が予想を遥に超えていたのか、少しの間無言になる。
そして頭が理解出来るようになったのか、軽く吹き出した。
「あ――、笑わないっていったろ！」
「ごめんごめん。あまりにもバカバカしいところで唸っていたんだなぁって」
「……悪かったな。小さなことでも気にするバカで、男にはプライドってものがあるんだよ」
「本当にごめんってば。で、迷っていたのは全部だったっけ？」
ああ、と肯定するかのように頭を縦にふる。
教科書の初めの方を眺め、悩ましげな表情をしていたので困った様子というのがわかった。
「急にごめん。迷惑になるんだったら……」
「あ、いや迷惑ではないよ。ただ、教室の中ででは話せないかな」

そんなに難しい話なのか、それとも黒板を使うという意味かな。
「先生――」
「ん、どうした、水城姉」
「柊君に基本から教えたいので、別室に移動してもいいでしょうか？」
水城姉がそういうと紅先生はため息をつき呆れた。
――その呆れた態度は確実に俺に対してだろうな。
水城姉が不真面目ってわけはなさそうだし、まぁ、理由として妥当なのは魔法の基本も知らねぇのか。って、感じかな。
「はぁ……、仕方ない。理解されていない状態でこの授業をうけられても困るからいいぜ。その代わり、まともに話を理解出来るランクにまでは上げてくれ」
「了解です」
許可をとった水城姉は俺の手をとって教室から出る。
そして1年生の教室が揃っている1年生エリアを通り抜ける。
他の教室の前を通る瞬間、奇妙なモノを見るような視線にさらされたが気にしない。
「水城、どこまで行くんだよ」
「あの部屋」
俺の手を握りながら真正面を指さす水城。
気になったので見てみると、このまま真っ直ぐのところにドアがあった。というより、部屋があると行ったほうがいいのかな。
そして真正面にあるドアを勢いよく開け、中に入っていく。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2888z/

マジックディフェクター

2011年12月11日12時52分発行